

# 抗精神病薬を内服治療している患者の嚥下機能に関する研究 —パタカラ体操の評価の一考察—

○藤川君江（日本医療科学大学） 藤田文子（元日本医療科学大学） 伊藤勝一（西八王子病院）

本研究の目的は、1年前からパタカラ体操を取り入れているA精神科病院の入院患者に対して、口腔機能（特に口唇、舌）の巧緻性および速度を評価する方法）を評価することである。A精神科病院療養病棟の入院患者で本調査の実施に同意が得られた20名を対象とした。オーラルディアドコキネシスの評価を実施した結果、全員がフレイルの基準値を下回っていた。今後もパタカラ体操を継続する必要があることが考えられる。

**キーワード** 精神障害者、抗精神病薬内服患者、舌口唇運動機能評価

## 1. 背景と目的

抗精神病薬服用の患者は、欠損歯、う蝕、歯周疾患の多さから咀嚼力も弱く、葉原性錐体外路症状の影響による摂食行動の不良が窒息事故を招くことから、口腔機能を悪化させないことや摂食行動を注意深く観察することが看護上で重要である。精神疾患患者は、抗精神病薬の作用により鎮静効果があり、副作用として嚥下障害、幻聴などの症状を医療者に訴えないことがある。加えて、精神疾患患者も高齢化しており、咀嚼嚥下機能が低下している。そのため、精神科看護師は精神障害者が安全に食べるための支援が必要である。

本研究の目的は、1年前からパタカラ体操を取り入れているA精神科病院の入院患者に対して、口唇運動機能（特に口唇、舌）の巧緻性および速度を評価する方法）を評価することである。

## 2. 研究方法

- 1) 調査協力者：A精神科病院療養病棟の入院患者で本調査の実施に同意が得られた20名
- 2) 調査期間：2019年2月～7月
- 3) 測定方法：口腔機能（特に口唇、舌）の巧緻性および速度を評価する方法である。5秒間でパ・タ・カをそれぞれ繰り返し発声させ、自動計測器（健口くんハンディ、竹井機器工業）を用いて、1秒間当りのそれぞれの音節の発音回数を1ヵ月に1回測定した。嚥下機能の客観的評価とし

て、食事中の誤飲の有無、食事内容を調査した。

## 4) 倫理的配慮

研究の趣旨を書面および口頭で説明し、同意書への署名を得た。なお、日本医療科学大学倫理審査委員会の承認（番号2018027）を得て実施した

## 3. 結果

対象者はパタカラ体操を1年6ヶ月実施した20名（男性6名、女性14名）であった。平均年齢は、女性69.6歳、男性66.2歳。疾患は、統合失調症10名（女性8名、男性2名）、躁鬱病2名（女性1名、男性1名）、認知症3名（女性2名、男性1名）、うつ病2名（女性1、男性1）、てんかん男性1名、その他の疾患女性2名であった。パ・タ・カの測定結果は全体的にフレイル群の基準値より低下していた。（測定結果は表1参照）特に認知機能に障害のある対象者や刻食を摂取している対象者は測定値が著しく低下していた。しかし、測定結果が不良な対象者においても、研究開始時より摂取していた食物の形態に変化がなく、食事中的誤飲など嚥下機能の低下を示す症状はみられなかった。パタカラ測定するタイミングと時間が決められていなかった。測定値の変動は、測定条件が一定でないこと、対象者の精神状態が影響していた。

表 1. 対象者および舌口唇運動機能の評価

法は治療として捉えられても、嚥下体操は誤

対象者	年齢	病名	食形態	2月			3月			4月			7月		
				パ	タ	カ	パ	タ	カ	パ	タ	カ	パ	タ	カ
1	80代	統合失調症	軟食	5.8	5.0	4.4	4.0	3.0	1.8	5.6	4.4	3.8	2.8	2.6	3.2
2	60代	統合失調症	常食	5.4	6.2	5.0	5.4	5.6	5.4	4.4	5.4	5.4	3.6	4.8	5.0
3	60代	MDI	常食	2.2	4.6	0.8	2.0	5.0	3.0	2.8	1.8	0.2	5.2	4.2	1.8
4	60代	統合失調症	常食	5.2	6.4	3.2	3.8	4.6	3.4	6.0	5.0	5.2	4.4	5.8	3.0
5	80代	認知症	刻み	2.6	3.4	3.2	3.4	2.6	3.2	4.6	4.4	3.6	3.0	3.2	3.2
6	50代	知的障害	常食	1.2	0.4	0.6	1.8	1.0	1.2	0.8	1.6	1.2	0.6	0.4	0.4
7	70代	認知症	軟食	4.6	6.0	3.6	2.4	4.2	3.4	4.2	4.4	3.2	2.8	3.8	4.0
8	70代	統合失調症	刻み	6.0	5.0	5.0	5.0	5.8	4.8	5.2	4.8	5.0	7.0	6.6	5.6
9	60代	統合失調症	常食	3.8	3.6	3.0	2.4	4.0	3.6	2.8	3.4	3.4	2.0	2.0	3.2
10	70代	統合失調症	常食	6.8	6.4	5.8	5.6	6.0	5.4	6.0	5.8	6.0	5.0	5.4	5.8
11	60代	摂食障害	常食	4.6	3.0	2.6	2.2	1.4	3.6	4.0	1.6	4.0	1.0	4.0	3.4
12	70代	統合失調症	刻み	5.4	5.0	2.6	4.4	4.6	1.4	5.2	3.4	2.0	不参加		
13	70代	統合失調症	常食	5.2	5.8	5.0	4.8	5.6	4.6	6.6	6.6	5.2	不参加		
14	60代	うつ	常食	6.2	5.6	6.0	4.0	4.4	4.2	5.0	5.4	5.4	6.2	5.6	5.8
15	50代	統合失調症	常食	2.0	0.6	0.2	0.6	0.8	0.6	1.6	1.0	1.2	1.0	0.7	0.4
16	60代	アルコール性認知症	常食	5.8	5.2	4.6	5.0	5.4	3.6	5.2	5.6	4.6	5.6	5.6	3.8
17	60代	統合失調症	刻み	0.4	1.0	0.4	0.2	0.0	3.2	0.4	0.6	0.6	0.2	2.8	0.8
18	70代	てんかん	軟食	2.4	2.4	18.0	1.8	1.2	1.4	眠気が強いため中止			0.8	1.0	1.2
19	60代	MDI	常食	6.8	6.2	5.8	2.6	6.4	5.0	3.6	5.8	2.2	転棟		
20	80代	うつ	刻み	5.2	5.4	6.0	4.6	5.8	6.0	4.6	5.0	5.8	2.8	3.8	3.8
平均値				4.4	4.4	4.3	3.3	3.9	3.4	4.1	4.0	3.6	3.2	3.7	3.2

#### 4. 考察

本研究は、抗精神薬を服用している精神疾患を有する高齢患者に口唇運動機能評価した。対象者に「パ」「タ」「カ」の単音節をそれぞれ5秒間ずつにできるだけ早く繰り返し発音させて、1秒あたりの発音回数を測定した。口腔機能の評価のフレイル群<sup>1)</sup>は、女性の基準値は、「パ5.6±1回」、「タ5.6±1.0回」、「カ5.2±1.0回」である。男性の基準値「パ5.6±1.0回」、「タ5.5±1.0回」、「カ5.0±1.0回」である。本研究の対象者の平均値がフレイル群よりも低下している。その要因として、抗精神病薬の副作用と精神疾患特有の意欲低下が考えられる。椎体外路症状により歩行や嚥下などが障害される<sup>2)</sup>。そのため、嚥下機能障害が起こる。精神疾患特有な生活動作として、動作緩慢や意欲の低下があり、パタカラ体操を昼食30分前に実施していたが患者に十分は理解が得られなかったと考える。そのため、パタカラ体操に目的を持って参加してもらうために、嚥下体操の評価を図でわかりやすく説明する必要がある。また、精神科の治療に作業療法がある。作業療

嚥予防や口唇運動機能の向上が期待できることを主治医や担当看護師からも説明があるとより積極的に取り組むことが考えられる。

精神科疾患は生活の障害であると言われている。病前にはできたことができなくなり、自信を喪失している患者が多い。そのため、口唇運動機能評価時は、発音回数が前回よりも多い場合には認めて褒めるが必要であるとする。また、研究開始時より、食事時の誤飲など嚥下機能の低下を示す症状はみられなかった。今後もパタカラ体操を継続する必要があることが示唆された。

#### 5. 結論

口唇運動機能の評価を実施した結果、全員がフレイルの基準値を下回っていた。今後もパタカラ体操を継続する必要があると考えられる。

#### 参考文献

- 1) 一般社団法人日本老年歯学会 2016  
[http://www.gerodontology.jp/committee/file/oralfunctiondeterioration\\_05.pdf](http://www.gerodontology.jp/committee/file/oralfunctiondeterioration_05.pdf)
- 2) 姫井昭男、精神科の薬が分かる本、医学書院、96-99, 2017